

10月17日(月)~11月14日(月) 満月セレクト

— 今回のセレクトター ご紹介 —

Music Selector : 臼井 ミトン



臼井 ミトン

古き良きアメリカン・ポップスやルーツ・ミュージックへの憧れを胸に、都会的なセンスでオリジナル楽曲を生み出す東京生まれ東京育ちのシンガー・ソングライター。宅録機材をリリックに詰め、自らアポイントを取りながらアメリカ中の伝説的なミュージシャンを訪ね歩く「旅する宅録アーティスト」として各種メディアで話題に。これまでに2枚のアルバムと1枚のシングルをリリースし、FUJI ROCK FESTIVALやRISING SUN ROCK FESTIVAL in EZO等大型フェスにも次々と出演、実力派男性シンガー・ソングライターとして音楽シーンにその名を着実に広めつつある。

今回のセレクトCD

1.



James Taylor / October Road (Columbia / CK 63584)

70年代から活躍を続けるシンガー・ソングライターの草分け的存在、James Taylorの2002年作。声が少しおじいちゃんになってさらに滋味の増した「J.T節」が堪能出来るのはもちろん、Ry CooderやSteve Gadd、Larry Goldingsといった凄腕ミュージシャン達の演奏も聴き応えたっぷり。古めかしい音楽的モチーフをスムーズなコンテンポラリー・サウンドに昇華させる名プロデューサー Russ Titelmanの手腕も冴え、秋の夜長にオススメしたい「大人のための」ロック・アルバム。

2.



Shannon McNally / Small Town Talk (Sacred Sumac Music / SSMX 8976)

近年大いに盛り上がりを見せているアメリカン・ルーツ・ミュージック、いわゆる「アメリカーナ」と呼ばれるフィールドで、派手さは無いが良質な作品をコンスタントに発表している女性シンガー・ソングライター。今作はニュー・オリンズを代表するピアニスト、Dr. JohnプロデュースによるBobby Charlesカバー集。Shannonの朴訥として飾らない歌声がBobbyの楽曲の雰囲気にとびつたりとマッチした好盤だ。

3.



Willie Nelson / Stardust (Columbia / CK 57206)

御年83歳の超ベテラン・カントリー・シンガー、Willie Nelsonが78年に発表したカバー・アルバム。古いジャズ・スタンダードを中心に、彼が幼少期に親しんだという10曲がセレクトされている。近年では大御所のロック歌手がスタンダード集をリリースするのがすっかりトレンドになっているが、このアルバムはそんな「アメリカン・ソングブック」ブームの先駆けとも言える名盤。ジャズやポップス、フォーク、カントリーといったジャンルの壁を全く感じさせず、歌の良さがしみじみと沁み渡る。アメリカン・ミュージックの良心、ここにアリ!

4.



Bonnie Raitt / Takin' My Time (Warner Bros. Records / 2729-2)

1989年に「Nick of Time」が大ヒットするまではこれといったヒットに恵まれなかったBonnie Raittだが、セールズ的にはイマイチだったワーナー在籍時のアルバムにも力作は多い。僕が個人的にオススメしたいのが彼女のキャリア3作目となる73年のこのアルバム。モータウンのダンス・チューン「You've Been in Love Too Long」のファンキーなカバーから始まり、Carole Kingを思わせる柔和で素朴な雰囲気楽曲と彼女のルーツである硬派なブルースがアルバムの中でうまく同居している。まだ少しあどけなさが残る歌声も愛らしい。

5.



Allen Stone / Allen Stone (ATO Records / 218122)

期待の若手ソウル系シンガー・ソングライターの実質的なデビュー作。近年の一大トレンド、レトロ・ソウルの流れを汲むサウンドではあるのだが、彼は「いかにも」な3ピースのスーツを着ていない。そのヒッピー然としたラフな出で立ち同様、このアルバムからは彼の飾らない素顔やパーソナリティが感じられる。無理に作り込んだハリボテみたいなヴィンテージ感ではなくて、「好きなことをやったら自然にこうなっちゃった」という風情。だからレトロ・ソウルというよりもむしろ、70年代の「バーバンク・サウンド」に通ずるような自由な雰囲気や朗らかさを感じてしまうのだ。